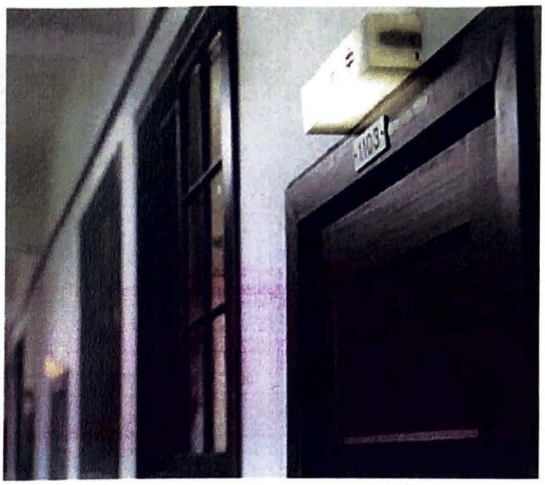

2008年4月に、立教セカンドステージ大学本科の第一期生96名（男性50名、女性46名）が、池袋キャンパスのチャペルで厳かな入学式をあげてから早くも1年近くが経ちました。

この大学の特色は、シニア層の「学び直し」と「再チャレンジ」という設立趣旨に沿い、平均年齢60歳の経験豊かな受講生と教員が一緒になって、学びの場を創り上げるというユニークさにあります。そこで、その約1年を振り返ってみたいと思います。

第1に授業面では、前期・後期を合わせて必修2科目・選択26科目、ゼミ（必修）と夏季集中講義3科目が体系的に展開されました。受講生の年間平均履修数は13科目と修了要件の9科目を上回り、座席は前列から埋まって質問も多いのが印象的です。水曜日の夕方の7つのゼミナールは、定刻に終わることはまずないほど議論が沸騰します。学部学生に交じっての全学共通カリキュラム「立教科目」での前期・後期1科目ずつ（選択）の受講にも熱心でした。正に当大学のキャッチフレーズ“学びの情熱尽きることなく”そのものです。

第2に立教セカンドステージ大学の学生生活を彩るイベントについてです。何と言っても9月に行われた八ヶ岳南麓の清里「清泉寮」での感動的な2泊3日のゼミ合宿です。約30名ずつ2つのグループに分かれ、清里の父「ポールラッシュ博士の生涯」のビデオ鑑賞、教員による講演会、自然環境観察、ライブコンサート等のプログラムに、学生気分を満喫し交友の絆が深まりました。課外の多彩なフィールドスタディ、ゼミ単位で企画した公開講演会等も多数開催されました。また、全員の役割分担としてゼミ長や各種の委員を選出して、自主的に活動計画を策定し運営することで新たなコミュニティーが形成され、大きな成果を挙げることができました。

第3に話題性では、日本で初めてシニア層の新たな学びの場として開校されたことから社会的にも注目の的となりました。多くの新聞・雑誌等が二十数回も取り上げ、インタビューでは受講生の協力で臨場感を添えました。立教大学発行の広報誌やwebコンテンツ『立教ジャーナル』、校友会会報『セントポール』にも毎号のように登場しました。自主的に集まった広報委員会発行のニューズレター『RIKKYO SECOND STAGE』（1・2号）も特筆されます。

最後に、受講生は第一期生としての責任感と愛校心が旺盛で感服しています。修了後の自分たちの校友会の創設作業も進み、諸活動や交流の場としてのサポートセンター等、社会との新たなネットワークが形成されようとしていることは意義深いと思います。また、来年度の専攻科への進学者は受講生の約半数の47名にものぼりました。来年度の本科二期生の募集は、この厳しい経済環境にもかかわらず、今年度同様に多くの申込みがありました。一期生の高い評価と評判が、二期生にも好影響を与えるものと確信しています。いよいよ迫る修了式は、3月23日に入学式と同じ池袋キャンパスチャペルでの開催が予定され、第一食堂で行う修了記念パーティーは密かにユニークな企画が進んでいるようで楽しみです。

坪野谷 雅之（つぼのや・まさゆき）
立教大学 総長補佐

立教大学経済学部経済学科卒業。住友信託銀行入社、同行香港金融現法・ロンドン証券現法、金融法人部・年金業務部・名古屋支店・常務取締役、住信アセットマネジメント・住信ビジネスサービス等を経て、立教大学総長補佐、ビジネスデザイン研究科講師（元）・立教セカンドステージ大学講師（現）。

生涯学習の現場 バックナンバーへ

受付
'09.2.02